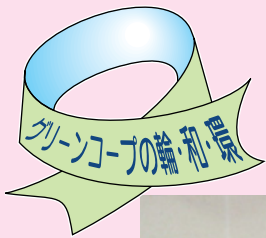




共生の時代

'11
8月

●発行:グリーンコープ共同理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅前一丁目5番1号 カーニープレイス博多3階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



大阪府生まれ。夫、長女(24)、長男(23)の4人家族。パン・お菓子・料理教室「アプリコティ」主宰。グリーンコープ生協おさか組合員

プロフィール

人と人をつなぐパン教室

料理研究家

吉村 英子さん

「物 心ついた頃から、料理を作った人に振舞うことが好きな母の姿を見て育った」と話す吉村さんが台所に立ちはじめたのは小学生の頃。高校生の頃にはおせち料理が作れるほどの腕前になった。食にこだわりを持っていた吉村さんは、結婚して子どもを持ち、それまで以上にできるだけ自然な食材や調味料などを選ぶようになった。パン作りが目覚めたきっかけは、「わが子に国産小麦で無添加の美味しいパンを食べさせたい」という思いから。国産小麦で作るパン教室に通いはじめ、パン作りの魅力に引き込まれていった。

1995年から10年間、夫の転勤で福岡に住んでいた。越してきた当初は右も左も分からなかったが、グリーンコープと出会い、班を通じて地域との関係を築いた。持ち前の明るさと小気味よいテンポの関西弁で、あつという間に周囲の人とも打ちとけてい

た。ママ友だちや、近所の人たちにお裾分けしたパンが評判を呼んだ。「パン作りを教えて欲しい」という声から近所の友人を呼んで、自宅でパン教室「アプリコティ」を開いた。4人の生徒からスタートしたパン教室は、口コミで徐々に広がり60人を抱えるほどの人気を呼んだ。国産小麦を原料に、パスタやケーキ作りなどの教室も開いていった。「教室といっても堅苦しくなくてね、みんなで他愛もない話をして笑っているの。和気あいあいとした雰囲気の中で、手作りの楽しさ、食の大切さを伝えていくことが私のスタイルかな」と吉村さん。子育てなどで忙しい生徒のことを考え、「パスタ料理の麺など何か1品を手作りしたら、ソースや具はレトルトにするなど、アレンジ次第で随分楽になりますよ」と、手作りを無理なく続けられる方法を提案している。

6年前大阪に戻り、ここでも教室を開いた。「パンを作っていると色んな好奇心が湧いてくる」と吉村さん。パンの歴史や由来、国産小麦がどこでどのように栽培されているのか、食材の大切さ、食育などを自ら学び、生徒に分かりやすく伝えている。他の料理教室にも足を運び、スキルアップにも余念が無い。現在、パンをはじめ、お菓子や料理を教える傍ら、近隣のパン屋でランチカフェを任せられるなど、吉村さんの活動は、「食」のつながりから多方面に展開している。

この秋も元気に「お米と野菜を食べよう!」に取り組めます



6面に関連記事

Contents

「鹿児島南センターワーカーズピース」設立 初の男女協同のワーカーズ誕生からはじまる グリーンコープの新しい時代	2
うちのメーカー・うちの生産者 ⑩ (農)佐伊津有機農法研究会 紅伊豆	3
～遺伝子組み換えのない世界をめざして～ 続けていこう!市民による調査活動 2011年度グリーンコープ自生GMナタネ汚染調査報告会 2011年GMナタネ自生調査全国報告集in大阪	4・5
お米と野菜を食べよう! -4- この秋も「お米と野菜を食べよう!」を さらにすすめていきます	6
第10回酪農生産者交流会 信頼が深まる「顔の見える関係」	7

月に2、3度博多の会議に出かけるようになり、新幹線で往復しています。桜が散り、緑が濃くなってきた頃、田に水が入れられ朝日にまぶしく光っていました。細い苗が植えられ、だんだん分蘗して風に揺れています。

送 信

であったのでしょうか。今の日本では他の産業が多く、若者を惹き付け、農業は機械化もすすみ作業も集約されていきますので、田で人影を見かけることは少なくなりました。見かけても、高齢の方が多いようです。若い人に魅力のある農業であってほしいと思い、再生産可能な価格での農業や消費者の見える農業の取り組みが、上手くマッチしてほしいと思いました。

グリーンコープ生協ひよこ理事長
土方 明子

初の男女協同のワーカーズ誕生からはじまるグリーンコープの新しい時代 「鹿児島南センターワーカーズピース」設立

グリーンコープは「21世紀型生協はワーカーズが主役」と位置づけて、ワーカーズ運動を推進しています。現在では、各単協で、オールグリーンコープでなど、立場も業種もさまざまなワーカーズコレクティブ（以下、ワーカーズ）が登場しています。

6月26日、グリーンコープかごしま生協の共同購入ワーカーズ「鹿児島南センターワーカーズピース（以下、ピース）」の設立総会が行われました。ピースの誕生は、新しいワーカーズが生まれたということだけでなく、男女協同のワーカーズとして、また、かごしまで誕生したワーカーズが一度解散したという経過を踏まえて、再び誕生したワーカーズとして大きな意味を持っています。設立総会のようす等を紹介しましょう。



出席者全員でピースサインをして記念撮影



かごしまの福祉ワーカーズからピースメンバーにタオルのプレゼント

共同購入事業のワーカーズ化へ大きな一歩

「かごしまで共同購入ワーカーズを立ち上げる」という構想のもと、鹿児島南支部で学習会が行われたのは2011年1月末。それから半年足らずで、今回のピースの設立となりました。

ピースは、配送・組合員拡大業務だけではなく、商品の物流業務や、総務・経理などセンターすべての業務を担って、かごしまに5つあるセンターの一つ、鹿児島南センターを運営します。センターをまるごと担うワーカーズとしては、おおいのワーカーズ「クロパー（別府）」、くまもとのワーカーズ「レインボー（松橋）」、ふくおかのワーカーズ「AMITY（大牟田）」に次いで4番目となります。

何より特長的なのは、9人の男性と11人の女性とが一緒に共同購入のワーカーズを立ち上げたということ

とです。代表は男性です。現在男性メンバーのいるワーカーズもありますが、これまで、ワーカーズ運動の担い手の多くは女性で、代表も女性たちが担ってき

ました。そのような中でピースのような男女協同のワーカーズが今回共同購入の分野で誕生したことは、今後グリーンコープの各単協の先駆けとなるものです。今、グリーンコープ共同

体はワーカーズ運動を支える事務局を設置し、オールグリーンコープとして「お店」「共同購入」の各ワーカーズ連絡会が運営され、その連絡会を中心にワーカーズ間の連携やサポートをしています。今回のピースの立ち上げに関しては、おおいの、くまもと、ふくおかの共同購入ワーカーズの協力・支援によるところが大きいとも言えます。

また近年、「収入は多くなくとも自分らしく生きがいを持つ働き方」といった新たな価値観を求める男性たちが登場し、ワーカーズという働き方に関心をもちはじめられています。今、グリーンコープのワーカーズ運動は新たな展開の時期を迎えたと言えます。

※共同購入の配送などを担うワーカーズ

「女と男」の共生を かたちに ワーカーズ誕生



共同体代表理事 田中裕子さん



ピース代表 彌勒仁さん



かごしま理事長 川原ひろみさん



共同体顧問 片岡宏明さん



共同体顧問 行岡良治さん

「ピース」の設立総会には、かごしまの組合員や福祉ワーカーズ、職員、他単協から理事長や共同購入ワーカーズの代表など約70人が出席。

「派遣職員として働いていて、当初センター業務をワーカーズにするという話があった時には他人事として聞いていました。学習会などに参加し、次第にワーカーズはやりがいや希望が持てる働き方だと捉えられるようになりました」と自身の気持ちに変化があったことを話しました。その変化のきっかけとなったのは、

共同体顧問の行岡良治さんのワーカーズについての話や、研修で見学したワーカーズの生き生きと働く姿や、ワーカーズ代表の話だった

といます。「私たちピースの成功が良い刺激となつて、グリーンコープの次の時代を担う男女協同のワーカーズが増えていくことを願っています。まずは、かごしまの職員と切磋琢磨し、彌勒さんの開会挨拶がありました。」

共同体代表理事の田中裕子さんは「力強い彌勒代表の挨拶と、設立総会開催に涙ぐむメンバーの姿を見て、今日にたどり着くまでに重ねてきた思いを感じる事ができます。元気なかごしまがオールグリーンコープの力となり、ピースの思いが広がっていくことを願っています」と挨拶しました。

第一号議案では、副代表の金丸巧さんが設立趣意書を読み上げました。「私たちはグリーンコープに集い、出会い、仲間になりました。組合員やグリーンコープの活動に深く関わっていくうちにグリーンコープの趣旨に賛同し、その輪を更に広げるためにワーカーズ・ピースを設立します」。最後は声高に「ピース!!」と力強く締めくくりました。

総会後の記念式典はピースメンバーの質問にパネラーが回答するという方法で行われました。パネラーは共同体顧問の行岡良治さん、行岡みち子さん、連合専務理事の片岡宏明さんの3人でした。

ピースメンバーからは「ワーカーズの今後」「組合員との関係の仕方」について質問が出されました。パネラーからは、「男・女それぞれの良さをもって理想と

意志を一致させ、ワーカーズとしての道を切り開いていくこと」、「人としての思いを大切にしながら、人と人としての関係をどうつくれるか」、「ピースの組合員と言ってもらえるようにどれだけ地域の組合員と関係できるか」など、アドバイ

スとも課題ともなる応答がありました。ピースのメンバーは真剣な表情で耳を傾けていました。彌勒さんは「今日の話を咀嚼しながら前向きにすすんでいきたい」とまとめました。

設立総会の運営はピースが主体的に担い、それをかごしまの職員がサポートし、総会後の懇親会は福祉ワーカーズによる食事など、かごしま全体でピースを支えていきました。

かごしま理事長の川原さんは「男性の持つたくましさや女性を持つしなやかさが融合された素晴らしいワーカーズが誕生しました。組合員と思いを共有できる主体の一つとしてどう成長していくのか楽しみで、頼もしい存在。『諦めない限りは解決する』という精神で共にならば乗り越えよう」と挨拶をしました。

「平和を意味するピース、目標を達成した時にするサインのピース、そして連帯の意味も込めて」名付けられたピース。「昨日よりは今日、そして明日はもっと活気あふれるワーカーズに協力しあって、安心して暮らせる地域の創出をめざして」ピースは次の時代のグリーンコープに向かって、一足先に歩きはじめました。

べにいず 紅伊豆

うちの生産者

110

熊本県天草市
(農)佐伊津有機農法研究会

うちのメーカー



一房一房丁寧に手入れをする白藤さん

佐伊津有機農法研究会(以下、佐伊津有機農研)は、熊本県天草市佐伊津町の産直生産者グループ。藍より青い天草の海に面した緑豊かな地域で、年間を通して野菜や果物を生産している。8月は紅伊豆(ぶどう)の最盛期。約1カ月の短い期間だが、おいしい紅伊豆を届けている。

会長の田中則男さん、副会長の山下作吉さん、会員の白藤勝則さん、事務局長の明瀬文男さんに話を聞いた。

新しい農地を生かして

佐伊津有機農研は1984年、農協の1部会として10人ほどで産直活動をスタートした。当時農協が雑木林を造成して作った農地で、農薬や除草剤などを使用していないことを生かし、有機農業をはじめたことがきっかけだ。グリーンコープの前身生協とのつきあいも、当時から始まっている。その後1992年、農協の合併を機に、有機農業やなるべく農薬を使わないという自分たちの考えを大切にしようと、農協から独立した。1993年には農事組合法人を取得した。



左から明瀬さん、田中さん、山下さん

調整しあうことが必要です。明瀬さんは農業経営の大切さを話す。

紅伊豆を作って22年

「佐伊津は気候が暖かなので、ぶどうの色付きは赤っぽくなりがち。それなら、はじめから赤系のぶどうを作ろうと、紅伊豆を作りはじめました」と白藤さん。約1haのぶどう畑は、それぞれが所有するエリアはきちんと区分されているが、棚はメンバー4人が共同で作っている。支柱などの経費の節約ができる。草刈は6〜7月に数回行う、もちろん除草剤は使わない。

自分の作った農作物には責任を持つと、生産者として袋詰めまで行っている。1988年には生産者名の入った独自のシールを作成、それを一品一品に貼るなど、その姿勢は長年一貫している。現在の会員数は49人だ。

生産者にとっても大切な「産直」

「取引先は、グリーンコープが7割。消費地から離れている佐伊津のような地域で農業を続けていくためには、みんなが協力し、

「それぞれの経営が成り立つためには、好きな時に好きな作物を作るといったことはなく、みんなが協力し、

「佐伊津は気候が暖かなので、ぶどうの色付きは赤っぽくなりがち。それなら、はじめから赤系のぶどうを作ろうと、紅伊豆を作りはじめました」と白藤さん。約1haのぶどう畑は、それぞれが所有するエリアはきちんと区分されているが、棚はメンバー4人が共同で作っている。支柱などの経費の節約ができる。草刈は6〜7月に数回行う、もちろん除草剤は使わない。

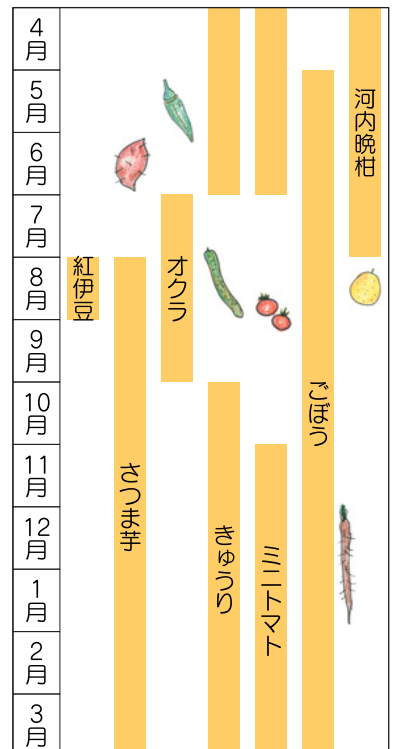


天草の海を望むさつま芋畑 (5月末から6月はじめに植え付けを行う)



花をつけた丸オクラ 丸オクラは少し大きくなったものでも柔らかく、粘りがあるのが特長

出荷品目と出荷時期(一部)



「一番大変なのは、出荷時期に熟れ具合を合わせることで、紅伊豆は糖度が高く、実離れがよい食べやすい品種ですが、その分軸から実が落ちやすく箱詰めが大変でした。一房ずつ袋に入れるようにしてからは、それも解決しました。毎年8月の終わり頃に、組合員さんとぶどう狩りの交流会をしています。今年もおもしろかった」という組合員さんの声を聞くと、うれしそうです。白藤さんは「ぶどうの房を手取る。22年間、豊かに紅伊豆を実らせてきたぶどうの木はそろそろ老いてきている。所々に若木も育てられ、世代交代の準備もしている。」

「佐伊津有機農研では、夏場の出荷品目が少ないことを生かして、太陽熱によるハウス内の土壌の消毒をしている。作付けしていない圃場一面に1カ月間ほど水を張って行う。水温の上昇で、青枯れ菌などの作物に有害な菌が殺菌される。その後、飼料用の稲を植え、塩分などの余分な成分を吸収させて土壌を活性化させる。長年この方法で土壌殺菌に取

地域の中で息長く続けたい産直

長年グリーンコープと産直を続けている佐伊津有機農研だが、生産者の平均年齢は50代後半だ。全国の農村の例に漏れず、ここでも後継者問題は深刻。「このような会を作って、みんな力を合わせて産直を続けてきてほしい」という声も高くなっている。グリーンコープ全体で補いあい、自分の体力に合わせた農業を続けることもできます。これからこの地域で産直が絶えることがないように努力をしたい」と田中さん。「後継者がいるメンバーは、現在5家族。これまで、地域としての後継者も考えてきました。新しくメンバーに加わった生産者もいます。今後もそうした視点で産直を継続していく仲間を増やしたいと思っています」と明瀬さん。

土壌の殺菌も工夫して

佐伊津有機農研では、夏場の出荷品目が少ないことを生かして、太陽熱によるハウス内の土壌の消毒をしている。作付けしていない圃場一面に1カ月間ほど水を張って行う。水温の上昇で、青枯れ菌などの作物に有害な菌が殺菌される。その後、飼料用の稲を植え、塩分などの余分な成分を吸収させて土壌を活性化させる。長年この方法で土壌殺菌に取

グリーンコープの産直は、佐伊津有機農研のような誠実な生産者によって支えられている。

民による調査活動 ない世界をめざして～

2011年度 自生GMナタネ汚染調査報告会

日本では栽培されていないはずの遺伝子組み換え(以下、GM)ナタネ。GMナタネを輸入している港の周辺や輸送ルートにあたる道路沿いでコンクリートやアスファルトの亀裂から芽を出しているナタネは、一見すると春先によく見かける「菜の花」だが、採取し検査すると、特定の除草剤に耐性を持つGMナタネであることが判明する。その数は、年々増加する傾向にあり、GM汚染は市民の暮らしのすぐそばで確実に広がりを見せている。

2005年から全国のGMに反対する団体によって一斉にスタートした自生GMナタネの調査活動が、これまで毎年続いている。

グリーンコープは6月27日、福岡市で自生GMナタネ汚染調査の報告会を開催し、組合員など122人が参加した。

7月9日には、GMナタネ自生調査全国報告集会在大阪で開催され、市民による調査活動の重要性が再確認された。

自生GMナタネ汚染調査結果

グリーンコープ エリア	調査箇所数	1次検査で反応が出た検体	
		ラウンドアップ	バスタ
おおさか	10	0	0
ひょうご	5	0	0
(島根)	5	0	0
おかやま	13	0	0
ひろしま	6	0	0
やまぐち	19	0	2
ふくおか	69	12	28
(長崎)	5	0	0
くまもと	48	0	0
おおいた	25	0	0
かごしま	16	0	0
みやざき	5	0	0
合計	226	12	30

(うち5は両方に反応)



ふくおか(北九州地域)の調査の様子



ふくおか(南地域)の調査の様子



▲ふくおか(福岡地域)の調査の様子



◀陽性反応の出たナタネは太い根が生えていた

ラウンドアップ・バスタは共に除草剤。遺伝子組み換えにより、これらの除草剤に耐性を持つナタネはこの検査で陽性反応を示す

2011年グリーンコープでは、12単協のエリア内226カ所で調査を実施。一次検査で陽性反応が出たのが37検体、そのうち5検体にラウンドアップとバスタ両方に耐性があることを示す陽性反応が出た。

2011年度自生GMナタネ汚染調査報告会では、陽性反応が出たやまぐちとふくおかから調査活動について報告があった。また、天笠啓祐さんによる講演もあった。

ふくおかの報告



ふくおか理事長 田原 幸子さん

今年度の調査地点は、GMナタネの分布状況を明確にすることを目的に、九州で唯一の輸入ナタネの荷揚げ港である箱崎埠頭(福岡市)を中心に、69箇所を調査した。結果、35検体に陽性反応が出た。箱崎埠頭内海岸沿いの道路では、今年もナタネが自生しており、昨年に続き陽性反応が認められた。そして、輸入ナタネによる汚染は、内陸部(北九州市若松区、糟屋郡新宮町、筑紫野市、朝倉市、朝倉郡筑前町)へも広がりを

やまぐちの報告



やまぐち理事長 松村 理津子さん

今回の調査活動に向け、産直活動委員会内部学習会を行い、模擬検査を実施してきた。各地域の理事会でも事前学習を行い、調査活動に取り組んだ。

山口県内には輸入ナタネの荷揚げ港や関連工場はないが、幹線道路沿いや河川敷、公園等で自生ナタネを採取した。県内19カ所を調査した結果、初めて採取した2カ所の検体で陽性反応が出た。そのうち1検体に数時間かかっており、再検査の必要があったかと思

われる。前回の調査で陽性反応が出た場所に今回はナタネの自生が見られなかったため調査を断念したが、カランシナなどの検体で調査する方法もあったことなど、事前の調査方法の検討など今後の課題も見えてきた。

今回、参加した組合員が住んでいる地域のナタネを採取し調査したことで、遺伝子組み換え問題が身近なものとなり、今後も調査活動を継続していく必要性を感じるものになった。

2012年度には山口県でGMO全国交流会の開催が予定されている。交流会に向けて、自生GMナタネの監視活動を続け、この取り組みを行政などに発信することも検討していく必要がある。

せている。これらの地点は、過去の調査で陽性反応が出ており、GMナタネの自生を再度確認することになった。箱崎埠頭の敷地を管理している業者へは、行政から清掃・衛生管理の徹底指導を行っているにも関わらず、GMナタネ自生の実態が変わらないこと、私たちのこれ以上広がらないようにとの願いも空しく拡散している現状に衝撃を受けている。

「GMナタネ抜き取り隊」からの報告

「GMナタネ抜き取り隊」は2009年にGMナタネ根絶をめざして、組合員やグリーンクラブ(グリーンコープ取引業者の会)のメンバーで結成された。ふくおかのGMナタネ自生調査の結果から分布状況を把握し、春と秋に箱崎埠頭付近のナタネを抜き取る活動を行っている。

「買わない、作らない、作らせない」を合言葉にGM食品の表示の問題にも取り組み、福岡県内には594.1haのGMフリーゾーン(GM作物が栽培されていない地域)が誕生した。

生物多様性を守っていくための大切な運動の一環として、ふくおかの取り組みは大きな意味を持つ。今後も行政や各業者と情報を共有しながら協議をすすめ、調査活動を継続していく必要性を強く感じている。

交通量の多い幹線道路沿いや大規模倉庫のフェンス付近など、GMナタネの抜き取り作業には危険を伴うことも多い。通行中の車によく見えるように看板を背負った作業。丈の低いナタネも見逃さないように気をつけている。活動をはじめたころはナタネを探すのも大変だったが、作業をすすめていくうちにナタネが目につくようになってきた。今後も地道な活動がGM汚染の拡大阻止につながることを実感しながら活動を続けていく。

共同体主催講演



天笠啓祐さん 遺伝子組み換え食品いらないキャンペーン、市民バイオテクノロジー情報室代表

遺伝子組み換え作物の環境汚染

2011年6月27日 福岡市

原発と遺伝子組み換えは、双子の兄弟である。原子爆弾の開発研究で成功を収めた学者たちは、次の研究対象として生命に関わることに目を向け、分子生物学を

に科学的な裏づけを持ったことになる。

愛知県ではナバナとGMナタネの交雑が起り得ることから、県が行っていたナバナの自家採種が中止された。アメリカやカナダでは有機農業を断念した農家も出てきている。西オーストラリア州では有機農家に隣接するGM農家からの汚染で、その農家の有機認証が取り消される事態も起



続けていこう!市 ～遺伝子組み換えの

2011年GMナタネ自生調査全国報告集会在大阪

広がる遺伝子組み換えナタネ汚染 ―汚染を止めるのは市民の力―

今年も「遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン」の呼びかけにより、GMに反対する全国の団体が、調査結果と活動内容を報告しあつた。調査活動の困難さや人員確保の苦労など現場からの情報をもとに、今後の地道な調査活動の継続をめざし情報交換した。今年で7年目を迎えた調

GMナタネ自生調査をしている 団体からの報告

生活クラブGM食品問題協議会・生活クラブ生活協同組合都市生活

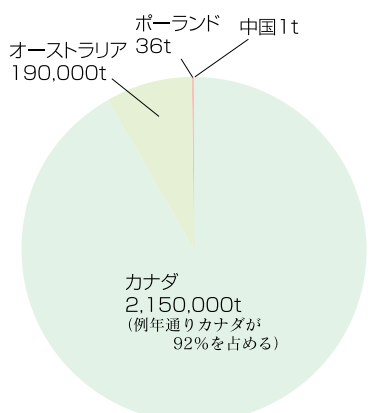
震災の影響で採取できない地域もありながら、主要港付近で調査を実施した。農水省の調査で昨年GMナタネの自生が見つかった八戸港は、津波の影響で自生ナタネは見つからなかった。ナタネの輸入総量に関して11年連続日本一の神戸

港では、港と工場をつなぐベルトコンベア下に自生が多く見つかっている。こぼれ種による自生と見られるが、工場の敷地内だったのが調査はできなかった。近くには近縁種の雑草も多く交雑が心配される。

生活協同組合コープ自然派事業連合

大阪と兵庫では3月下旬から5月中旬にかけて、多

日本に輸入された
ナタネ関連品目の輸入先と輸入量



2011年1月から12月までに日本に輸入されたナタネ関連品目の累計数は2,344,000t。昨年より270,000tの増加。(財務省貿易統計)

くの役員と組合員の協力を得て、それぞれ44検体ずつを採取。過去にGMナタネが見つかった神戸港付近は、かなり細かく歩いて調査した。しかし今回は春先に気温が上昇しなかつたせいか、菜の花を見つけたこと自体が難しかった。京都では19検体、奈良では24検体を採取し、2カ所

遺伝子組み換え食品を 考える中部の会

所で陽性反応を確認した。四国4県で合計48検体を採取したが、陽性反応は見られなかった。

農民連食品分析センター 遺伝子組み換えナタネ調査隊

2011年4月11日から6月3日にかけて、横浜から博多までの主要港、合計10港の調査を行った。119検体を採取し、初めて調査した門司港を含む全ての港でGMナタネを検出した。博多港以南の調査地点では、輸送とは全く関係ないと思われる極めて細かい一般道でも検出があった。この地点が高速道路の高架下であることから博多港からは高速道路を使った輸送が行われていると考えられる。今の時点では、行政や第三者機関がGM作物の種子やそれを原材料にした製品の輸送経路情報の集約を

するまでには至っていないが、今後は自生GMナタネをなくすための具体的な取り組みの実現をめざさなければいけないと考えさせられる結果となった。

三重県鈴鹿市から松阪市の区間で調査を実施。昨年6月の調査で、アブラナ科雑草との交雑を思わせるGM陽性の個体が複数確認されたが、11月の調査では同様の交雑個体を確認することはできなかった。「抜き取り隊」は参加者の交通費自己負担を軽減するために、マイクロボスを用意し、40人の参加者が事故なく調査をすることができた。しかし、予定した区間(約20km)の一部で、抜き取り作業ができないところがあった。したがって、実際のアブラナ科植物の数は採取データを上回る数になると思われる。採取した637本のアブラナ科植物のうち、セイヨウナタネは406本、ラウンドアップ耐性の陽性率は33.7%、バスター耐性の陽性率は38.9%。セイヨウナタネ以外の植物にGM陽性は見られなかった。

研究しはじめた。研究に研究を重ねていき、やがて「遺伝子組み換え技術」が開発されていった。「人間がコントロールできない技術」の怖さは、原子力技術の開発と共通する。

GMナタネの栽培国は現在アメリカ・カナダ・オーストラリアの3カ国。これは世界の主要ナタネ生産国と同じである。

GM作物の問題点は、食の安全を脅かし、環境を破壊することにとどまらず、除草剤による健康被害も広がり、多国籍企業の種子独占による食物支配をもたらしている。

最近の報告では、カナダの大病院産科婦人科の調査では除草剤やBt(殺虫性)毒素は、妊娠している女性に蓄積しやすいことが分かっていた。さらに、へその緒からも検出され、GM作物の脅威は次世代に受け継がれている可能性が高い。GM作物の持つ有害な成分は私たちの子々孫々にまで及ぶということ

ている。汚染では台湾から買った種子を全体の5%程度しか使っていないにも関わらず、その種子がGM種子だったことが判明し全部のパイヤーが刈り取られることになった。

今後このようなことが次々に起こりうるのが懸念される。輸入食品に頼らず、地産地消中心の社会へ向かうことが最重要課題ではないかと考える。

市民は予防原則に立つことで環境を守り、生活を守って子どもや家族の健康も守ろうという視点がある。この視点が、国や学問としての調査研究とは決定的に違うものだと見える。

市民による調査が国を動かす、社会を変えていく力になる。市民による自生GMナタネ調査の意義はそこにある。

※パチルス・チュロリゲンシス菌がつくる殺虫性タンパク質。トウモロコシなどの遺伝子組み込まれ、殺虫性作物としてアメリカで作付けされているが、耐性をもつ害虫の出現など、環境への影響が顕著になりつつあ

パネルディスカッション



菜の花プロジェクトネットワーク代表藤井絢子さんによる講演と、チェルノブイリ救援・中部理事神野英樹さんによるロシアでの実践的な活動報告のあと、会場からの質問に答える形式でパネルディスカッションが行われた。東日本大震災の影響から質問の多くは原発や放射能汚染や原発に関するものだった。藤井さんのもとには、ナタネは土壌中に蓄積した放射能を吸収する(3%程度)性質があることから問い合わせが多く寄せられるが、一概に「ナタネを植えれば解決する」という問題でもない。風評に惑わされることのないよう市民ひとり一人の力が大切になることが強く発信された。

※1 1970年代、琵琶湖の水環境を守るためのせっけん運動に端を発し、菜の花を植え資源循環型社会をめざす活動
※2 チェルノブイリ原発事故の被災者の救援活動を行い、自立支援の一環として菜の花による土壌浄化、循環型地域エネルギー創設などに取り組む

映画 パシー・シュマイザー モンサントとたたかう



―それは除草剤を撒いても枯れない遺伝子組み換えナタネだった。それは、まるでフランケンシュタイン植物だ―

グリーンコープの報告会で映画を観る参加者

1997年、カナダの農民パシー・シュマイザーが、風で飛ばされてきた遺伝子組み換え種子によって畑を汚染された上に、その種子を開発したモンサント社に特許権の侵害で訴えられた。巨大企業に立ち向かう一人の農民を追うドキュメンタリー映画。

(配給: 小林大木企画)

秋の取り組み学習会
2011年7月4日
福岡市

この秋も「お米と野菜を食べよう！」をさらにすすめていきます

2011年度は、「安心・安全な食べものを守る」「日本の農業を守る」に加えて、「お米と野菜を食べて健康に生活していく」を意識して、グリーンコープの食べもの運動を元気にすすめています。

グリーンコープの米と野菜の生産者とオールグリーンコープの組合員が出会った2月のスタート集会から半年、各単協では、「お米と野菜を食べよう！」の取り組みがすすめられています。各単協での秋の取り組みのスタートにあたって、改めてその意義を確認し、それぞれの単協の取り組みを共有する学習会が、約400人（組合員と生産者、事務局）の参加で開催されました。

今号では、学習会のような報告をします。グリーンコープの食べもの運動の象徴である「産直のお米と野菜」の素晴らしさを語り、おいしくいただく秋の取り組みがはじまります。



-4-

学習会のはじめに、

中裕子さんが「2月のスタート集会以降、各単協で『お米と野菜を食べよう！』の取り組みがすすめられています。さらに一人でも多くの組合員に伝えていきます」と、秋の取り組みに向けた決意を表明しました。続いて、連合専務理事片岡宏明さんによる講演がありました。2月のスタート集会以降の各単協での取り組みによって、お米と野菜の利用が増えていくという、この半年間の成果を数値で確認することができました。

米と野菜の生産者を代表して、「福岡市農協普通作研究会」と「百姓倶楽部八女の郷」の生産者からの報告もありました。

後半は、各単協から取り組みの報告が行われました。それぞれの単協の意気込みが前面に出た、趣向を凝らした寸劇や替え歌なども交えての発表でした。グリーンコープの産直の意味を確認し、お米と野菜の安心・安全はもとより、そのおいしさを体感し、それぞれが感じたことを周りの組合員に伝えていくようすが報告されました。8月にオープン予定のお米と野菜のウェブサイトのデモンストレーション、かごしまで商品開発に取り組んできた東ティモールコーヒーのアピールも行われました。

最後におおさかの理事長藤原登美子さんが「生産者と交流して、生産者の顔を思い浮かべながら産直野菜をいただいています。そんな関係性を大事にしながら、この取り組みを元気にすすめていきたい」と挨拶し、学習会は終了しました。

講演 お米と野菜でグリーンコープを伝え、広めていきましょう！

グリーンコープ組合員の安心・安全な食べものを食べていきたいという素朴な思いは、農薬の心配のない米や野菜や果物を生産者とともに育てていくという産直運動へと発展していきましました。その思いは、生産と消費のあり方へと視野が広がり、食料の国内自給率を考えるまでになりました。日本の農業を守ろうと産直

運動を展開してきています。誰がどのように作っているのか分かるという産直は他にもありますが、生産者と交流ができ、心が通いあう関係や、農業が継続再生産できる価格での取引とということまでは、他の生協ではなかなか実現していません。例えば、お米は現在の相場価格ではとても再生産できないと言われていました。グリーンコープの赤とんぼA無農薬米の生産者には、生産奨励金として現在の相場価格の約2倍の収入が保障できるようになっています。青果についても再生産可能な価格を話しあうて決めていきます。安心・安全な食べものが生産されるように環境を守り、農業を守る、ということがグリーンコープの設立の基本にあります。

この半年、ワーカーズや職員が、生産者と交流したり、産地で農作業等を体験することで産直を実感し、組合員に伝えていく取り組みを各単協で行ってきました。その結果、供給全体が前年比約95%と停滞する中、お米の予約が前年比105%、青果の利用も99%と成果が出はじめています。中でも、各単協で利用普及に取り組んだ人参やなすは、前年比120%超と利用が伸びています。これから、組合員が組合員へグリーンコープのお米と野菜のおいしさと、産直の素晴らしさを直接伝えていく取り組みが本格的にはじまります。そのことによって多くの組合員がグリーンコープのお米と野菜を好きになるはずだ。そして、そういうグリーンコープの組合員になりたいと思う消費者が増えていくという勢いで、秋の月間に向かっていけたらと思います。「お米と野菜」「産直」はグリーンコープそのものです。この取り組みによってグリーンコープを伝え、広めていきましょう。

福岡市農協普通作研究会

自分の田んぼの防除は自分で判断



代表部会長 松村角之助さん
代表副部会長 三苦則彦さん
代表副部会長(会計) 山田大作さん
事務局(JA福岡市米販売課) 中村稔彦さん

JA福岡市が減農薬(稲作)栽培をはじめたのは、1981年。福岡市内の「稲作・野菜・花卉等」の生産者グループに、「めまい・手足のしびれ等」についての自覚症状調査を行った結果、45.8%に何らかの中毒症があることが分かったことがきっかけでした。それまでは、農薬の量を多くして、見た目にきれいな作物を作るのが当然だったのですが、これではいけないと考え、各自が1枚の田んぼを試験田として、試行錯誤で減農薬に取り組みはじめました。その結果、それまでの基準どおりに農薬を散布しなくても稲はちゃんと実ることや、田んぼ1枚1枚で病害虫の発生状況が異なり、田んぼの状況に応じた防除が必要であることなどが分かりました。私たちが行っている減農薬運動の「減農薬」とは、「自分の田んぼの防除は自分で判断しよう」というのが基本姿勢です。自分の田んぼの虫は虫見板で自ら観察し、防除が必要かどうか自分で判断しています。

1983年にグリーンコープ生協ふくおかの前身生協(ふくおか西部生協)から「農薬を減らした米なら取り扱いたい」との申し出があり、グリーンコープとの付き合いがはじまりました。532俵からはじまった減農薬米の産直は、今では赤とんぼAとBで1年に約2万俵生産できるまで拡大しています。

百姓倶楽部八女の郷



作物には一つひとつにストーリーがあります

代表 松尾高生さん

私たち「百姓倶楽部八女の郷」は福岡と熊本の間境にある約30人の生産者グループです。にんにく、カラーピーマン、なす、柑橘類、キウイなどいろいろなものを生産しています。

私自身は祖父の代からみかん作りをはじめて3代目です。父が無農薬・有機栽培をはじめました。はじめたばかりの頃は周りに受け入れてもらえず厳しい状況だったようですが、今では周りからアドバイスを求められるようになりました。

今は、私たちが作ったものを組合員のみなさんに継続して注文してもらい、私たちも生活できているといういい循環ができています。そこにはもちろん、安心・安全でおいしいものを作りたいという気持ちがベースにあります。

私たちはいろいろな種類の作物を作っています。例えばみかんは、下の方に実ったものは猪に食べられたり、上の方のはヒヨドリに食べられたりします。ヒヨドリのくちばしは細いので、つつかれたのを気づかずに出荷すると、防腐剤をかけていないのでそこから腐ったりします。

ベビーリーフを作っているメンバーは、水をかける時間も10秒、15秒と変えてみるとか、いろいろチャレンジをして工夫しています。

このように、一つひとつの作物にストーリーがあります。組合員のみなさんと交流の機会をたくさん持って、こういうことをお話できたらと思います。

信頼が深まる「顔の見える関係」

第10回酪農生産者交流会



組合員を代表して、グリーンコープ生協ひろしまの藤原秋代さんから生産者代表に目録を手渡しました

組合員を代表して、グリーンコープ生協ひろしまの藤原秋代さんから生産者代表に目録を手渡しました。グリーンコープから生産奨励金と「生

産者へのお手紙」を贈呈後、グリーンコープ連合畜産部から「この菊池地域の生産者の皆さんが、努力しながらnon-GMOの飼料を与えて牛を大切に飼っています。そんな安心できる原乳を、メーカーがきちんと衛生管理し、パスタライズ殺菌して作っています。グリーンコープのびん牛乳は、全国のどこにもないすばらしい牛乳ということを自覚して、利用を伸ばしていきたいと思えます」との報告がありました。

次に、「生産者の一日」をまとめたスライド上映がありました。毎朝早くからの作業、自家製のサイレージ飼料（自家生産の飼料用とうもろこしなどで作る発酵飼料）作り、組合員から贈られたタオルが大切に使用されているようすなど、生産者の矢野桂吾さんから説明がありました。グリーンコープとの付き合いがはじまって30数年、長い歴史の中でお互いの信頼関係ができています。生産者も一生懸命がんばっていますので、安心して飲んでいただくこと

ができると思えます」と生産者の思いを伝えました。次に、グリーンコープ連合畜産部による「レンネットの実演」がありました。グリーンコープのびん牛乳が生乳により近い牛乳だということに参加者全員で再確認し、生産者に、このようにして組合員にびん牛乳のよさを伝えていくことを知ってもらいました。

最後に、グリーンコープ生協ふくおかの上野恵美さんが「今日聞いた飼料のことや品質管理のこと、私たちが贈ったタオルが大切に使用されているようすなどを単協で伝えていきたいと思えます。利用普及では、知識だけではなく、『手間暇かけたものはおいしいよね』ということを組合員に伝える生産者が牛乳が足りなくて大変になるぐらい、がんばっていききたいと思えます」と挨拶をしました。

組合員・生産者・メーカーが一堂に会して、お互いに信頼を深めることができました。交流会となりました。

※牛乳中の水溶性カルシウムが、子どもの胃の酵素であるレンネットと反応すると固まる性質を応用し、殺菌温度による生乳に含まれるカルシウムの熱変成具合を調べる実験

グリーンコープを代表して、グリーンコープ生協がの野田さおりさんが「予約の取り組みなどががんばっています。びん牛乳の利用は伸び悩んでいます。今日の交流を単協での利用普及に生かしたいと思えます」と挨拶しました。

続いて、non-GMO牛乳生産者の会委員長の梁池久芳さんから「生産奨励金をいただくことは、生産者として大変励みになります。鋭気をもっています。これからも一杯おいしい牛乳を作っていきたいと思えます」と挨拶がありました。

「昼食交流会」生産者と組合員が一緒に昼食をとりながら交流しました。生産者からは衛生管理に気を配って安心・安全な牛乳を生産していること、組合員も生産者に会って直接話ができることに感激しているようすでした。

「単協からの報告」やまぐち、くまもと、おおいた、かごしま、みやざき

2011年5月26日、第10回酪農生産者交流会が熊本県菊池市のJA菊池農業総合情報センター「パシオン」にて開催されました。2010年10月から2011年3月までの生産奨励金3,276万円の目録を生産者に贈呈しました。グリーンコープの組合員、事務局など23人、生産者24人、JA菊池2人、熊本県酪連3人、雪印メグミルク(株)2人が参加しました。



やまぐち びん牛乳工場見学の様子をパネルにして組合員に伝えている



くまもと レンネット実験でよさを伝えたり、牛乳おすすりレシピを紹介



かごしま 予約申し込みつきの情宣チラシを発行したり、職員や新規加入者向けに牛乳の良さをアピール



おおいた 地域組合員総会や新規加入者に向けての冊子でアピール



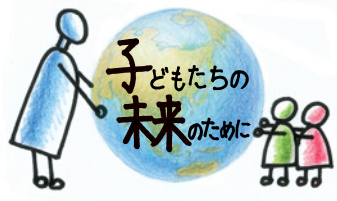
みやざき 牛乳情宣チラシを年4回発行したり、単協開発の「ミルクプリン」をおすすりしている

東京電力の原子力発電所の事故を受けて行った残留放射能検査結果③

6月21日～7月14日に検査した15品目の調査結果を報告します。1品目については、グリーンコープの暫定基準値(10ベクレル(Bq)/kg)内ですが、残留放射能が検出されています。

商品名	製造日等	検査日(送出日)	放射能検査結果	
			セシウム134(Bq/kg)	セシウム137(Bq/kg)
山芋と蓮根の肉だんご(黒酢あん)	2011年6月 7日	2011年6月20日	ND	ND
えびといかの彩り焼き	2011年6月 7日	2011年6月20日	ND	ND
産直びん牛乳パスタライズ	2011年6月15日	2011年6月22日	ND	ND
さくらんぼ(山形県 米沢郷牧場)	2011年6月22日	2011年6月27日	1Bq/kg	5Bq/kg
贈)とろろそば・つゆ詰合せ	賞味期限(2012年5月)	2011年6月25日	ND	ND
贈)ダグワース詰合せ	賞味期限(2011年8月)	2011年6月27日	ND	ND
パレスチナのバージンオリーブオイル	2011年6月10日	2011年6月17日	ND	ND
おつまみ豆	賞味期限(2011年8月10日)	2011年6月 2日	ND	ND
いかボール	賞味期限(2011年8月 8日)	2011年6月 2日	ND	ND
山芋と蓮根の肉だんご(黒酢あん)	2011年6月23日	2011年7月 4日	ND	ND
産直赤とんぼ米のライスバーガー牛肉玉ねぎ	2011年6月20日	2011年7月 4日	ND	ND
骨ごと食べられる サバの味噌煮	2011年6月 2日	2011年7月 4日	ND	ND
さくらんぼ(長野県 飯綱)		2011年7月 4日	ND	ND
産直国産牛モモうす切スライス300g(鹿児島県産)	2011年6月28日	2011年7月 6日	ND	ND
産直国産牛モモうす切スライス300g(岡山県産)	2011年6月28日	2011年7月 6日	ND	ND

検査対象エリア グリーンコープは商品や原料について放射能汚染が心配される地域を関東から南東北地方と想定しています。文部科学省から出されている(新聞で報道されている)大気中の「環境放射能水準調査結果」を基礎に、通常レベルより高いエリアについて念のため検査対象としています。なお、対象エリア以外の商品でも、牛乳など日常的に多く取り入れる商品及びしいたけ等放射性物質が蓄積しやすい商品は検査することとしています。
※水産物については、近隣海域の放射能汚染状況が調査・公表されますので、その情報などをもとに漁獲海域によって、残留放射能検査をする対象を判断していきます。
検査対象 3月11日以降に、生産・製造・保管されていた商品及び原料を順次検査しています。
検査機 放射能汚染食品測定室で行いました。表中の「検査日(送出日)」は検査のためにグリーンコープから、測定室に検体が発送された日です。到着後、2日以内に検査を行っています。
今後の報告 毎月、共生の時代で報告します。(ホームページには、週単位で掲載します)
について ・グリーンコープの基準値(放射性セシウム10ベクレル/kg)を超える残留放射能が検出された場合は直ちに報告します。
※表中の「ND」は、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。



No.36

原子力発電がやっていることは

原子炉の中で燃料となるウランを核分裂させると高い熱を発生します。その熱でお湯を沸騰させ、水蒸気でタービンという羽根車を回して発電をするのが原子力発電です。発電の方法は火力発電と同じで、熱になる材料が石炭・石油か、核燃料か、という違いがあるだけです。

それなのになぜ原子力発電が特別な危険を抱えているかといえば、原子力の燃料であるウランを燃やせば(核分裂させれば)、「死の灰」と呼ばれる核分裂生成物質が否応なくできてしまうからです。ひと口に死の灰といっても、寿命の長いものも短いものもあります。代表的な核分裂生成物であるセシウム137の半減期(その放射能が半分になる時間)は30年であり、それが1000分の1に減ってくるまでには、300年の時間がかかるのです。

死の灰を生み出さずに核分裂を起こすことはできません。このことが、原子力発電が抱える危険の一切の根源なのです。

未来の子どもたちのために、危険な原子力発電はいりません。

参考文献: 小出 裕章氏 2003年度 グリーンコープ連合組織委員会 脱原発学習会講演録
2008年度 グリーンコープ共同体組織委員会 脱原発学習会講演録
グリーンコープ共同体組織委員会

いま地域を考える

No.215

中海の再生をめざして、市民の力を結集



鳥取・島根両県で取り組む一斉清掃の様子



中海は鳥取県西部と島根県東部にまたがって位置し、西側は宍道湖、東側は日本海とつながる汽水湖である。海水魚と淡水魚のどちらもが生息し、これらを餌とする多くの鳥類も生息・飛来する。2005年にはラムサール条約湿地に登録された。10年前、中海の貴重な自然を守ろうと米子市に住む市民が立ち上げたのが「NPO法人中海再生プロジェクト（以下、再生プロジェクト）」である。事務局の周防奈緒美さんと上田和泉さん（ともにグリーンコープ生協とつとり組合員）に話を聞いた。



NPO法人 中海再生プロジェクト

時代の波に翻弄されて

中海は、かつてアカガイの一種であるサルボウガイやスズキなど豊富な漁獲量を誇る湖だった。夏になると子どもたちが泳ぎ、沿岸地域の人々は古くから中海と共に生きてきた。

しかし、1960年代にはじまった農地造成のための大規模干拓と淡水化事業により、中海の風景は大きく様変わりしていく。1970年代に入ると国は減反政策に転じ、さらに全国的な公共事業の見直しによって、2000年には干拓事業が、2002年には淡水化事業も中止。中海は国の政策に振り回された。

その間、水質汚染や環境破壊を心配した周辺住民や漁業関係者による淡水化反対運動も繰り広げられた。中海を愛する多くの人々が心を痛め続けた。

干拓・淡水化事業がすべて中止された後に残されたのは、無残な姿となった中海だった。かつての豊かな自然は剥ぎ取られ、サルボウガイはもう棲めなくなっていた。そんな中、立ち上がった市民がいた。

10年で泳げる中海に

きっかけは地元のケーブルテレビ局（株）中海テレビ放送が、2000年1月から放映をはじめた「中海物語」という番組だった。番組では、中海の自然を取り戻そうと活動している市民を毎回紹介した。その数



事務局の周防さん(右)と上田さん(左)

3つの事業を柱に

再生プロジェクトでは3つの事業を行っている。1つ目の「中海体験クルージング」は、ヨットやクルーザーで沖に出て、多くの人に中海の現状を知ってもらうことを目的としている。2002年から毎年8月に行われており、今年で10回目。毎年200人以上の参加がある。

2つ目の「中海アタプトプログラム」は、2005年に開始した市民による清掃活動である。住民と自治体が連携をとりながら、団体や個人が中海湖畔にそれぞれの担当区域を持ち、湖岸清掃に取り組んでいる。2006年に米子地区や安来市の一部の清掃からスタート。会を重ねることに参加者が増え、清掃する範囲も中海全体に広がった。グリーンコープ生協とつとりでも理事やメンバーが中心となって、米子市の湊山公園近くの湖畔を定期的に清掃している。

そして、3つ目は「中海未来マップ制作」。夕暮れの中海湖畔で行うコンサートや、中海の将来像を描くポスターコンクールなどのイベントをとおして、未来を担う若い世代に中海のことを知ってもらい、将来的に中海をどのように活用していくかを考えようという事業である。

これら3つの事業はそれぞれ会員による実行委員会形式で運営されており、全体の事務局を務めるのは（株）中海テレビ放送である。周防さんと上田さんは、テ

中海宣言

中海。それは先人から受け継いだ貴重な財産。かつては豊かな汽水湖群を見渡しても、この自然体系はあまり見られない。私達は、この中海が市民一人一人にとってかけがえのない財産であることを再認識し、この中海の豊かな自然環境を市に引き継いでいくことを宣言します。

一中海テレビ放送「中海物語」より



親子で力をあわせて大きな袋一杯に

ふるさとの中海を大切に受け継いでいく

「中海・宍道湖ラムサール条約登録記念一斉清掃」が、6月12日に行われた。鳥取・島根両県が年1回主催している大掛かりな取り組みで、再生プロジェクトの事務局の仕事を担う。プロジェクトへの関わりについて、最初はテレビ局の社員としての仕事と受け止めていましたが、今では自分のライフワークのような存在になりました」と語るのは周防さん。「さまざまな団体が集まって協力して取り組むものなので、全体がうまくすすむように段取るのは大変ですが、一度参加してもらえば次の年につながると思います」と上田さんは目を輝かせた。

再生プロジェクトのメンバーであるグリーンコープ生協とつとりからも、組合員や職員など18人が参加して彦名地区の湖畔を清掃した。一斉清掃は今回初めてという組合員の矢島さんと広芳さんは、共に子どもと一緒に参加。「中海の毎日表情が変わるさまが美しいと思います。このふるさとの風景を子どもたちにも愛着をもって受け継いでもらいたい。汽水という貴重な環境を大事にしていきたいです」と矢島さん。広芳さんも「こうして親子で清掃活動に参加することで、自分たちの住む地域の自然を守っていくという気持ち芽生えてくれたらいいなと思います」と懸命にこみを拾っていた。

「10年で泳げる中海にしよう」を合言葉に、少数の

2011年6月の組合員数 395595人 (6/20現在)

リユースリサイクルデータ 2011年5月分 リユースびん 回収本数 158,328本 回収率 54.4% モールドパック 回収重量 32,810kg 回収率 89.6%	牛乳びん 回収本数 709,740本 回収率 100.2% (4月17日～5月14日回収分) トレー 回収重量 9,480kg 回収率 46.4% 仕分け袋 回収重量 1,235kg 回収率 4.5%	フードマイレージ 2011年6月までに組合員の利用によってたまったのは 111,682,548.0 CO2に換算して11,168トン削減したことになりました
		アジア民衆基金 2011年6月までに組合員の利用によってたまったのは 17,009,764円

放射能汚染測定結果は、7面の残留放射能検査結果に掲載しています。

※1 特にならぬ鳥の生息地として重要な湿地に関する条約。国際的に重要な湿地を世界が保全することを目的とした条約で、1971年にイランのラムサールで開かれた水鳥と湿地に関する国際会議で採択された。 ※2 1985年にアメリカ合衆国で生まれた、住民と自治体が協働ですすめる新しい「まち美化運動」。アタプトとは「O」を養子にする、という意味で、市民が公共スペースの一定区間をわが子のように愛情をもって面倒を見る（＝清掃・美化活動をする）ことから名付けられた。日本には1998年に導入され普及がすすんでいる。